オリエンテーリング
道場 第 72 回

スイスの世界選手権

松澤俊行

「地の利があれば、地の不利もある」。「強いことはつらいこと」。これらの言葉が頭に思い浮かんで来る場面が、今年のスイスチームにあった。

世界選手権女子スプリント表彰式
（WOC2012 公式サイトより）

世界選手権 2012

2012 年のフット O の世界選手権、開催地はスイス、ローザンヌ。前回のスイスでの世界選手権は 2003 年。これでスイスは、何と「10 年間の内に 2 回の世界選手権を開いた国」となりました。果たして、この大会は「スイスの、スイスによる、スイスのための世界選手権」となったのでしょうか。今回のオリエンテーリング道場では、日本代表選手として出場した道場主が、「スイスにとっての世界選手権」をレポートします。

シモーネの国、チャンピオンの国スイス

2003 年の世界選手権。スイスのラッパーズビルで開催されたこの大会では、前回 2001 年フィンランド大会(当時の世界選手権は隔年開催でした)のロングを制したシモーネ・ルーダー選手が「全種目優勝」の快挙を達成しました。シモーネ選手は、2005 年日本大会でも全種目で優勝しており、結婚後はシモーネ・ニグリと呼ばれています。(なお、夫で元スイス男子代表のマチアス・ニグリは、2006 年以降スイスチームのコーチを務めています。）シモーネ選手は、2012 年大会でも全種目出場が予定されていたため、「通算 3 度目の、そして自国開催大会での 2 度目の全種目優勝」が達成されるか否かが注目されました。

シモーネ選手が名選手であることは疑う余地がありませんが、2003 年以降、次々に男子チャンピオンが生まれている点もスイスの凄さとして挙げられます。2003 年以降、2011 年大会までの 9 回の大会で、男子の世界選手権優勝者を 4 人輩出しており、中でもダニエル・フブマン選手はロング 2 連覇(2008 年と 2009 年)の他、スプリントでも優勝(2011 年)と、光る実績を誇っています。このダニエル選手が故障で欠場となったことは残念でしたが、新たなチャンピオンの誕生も期待され、それも見所の一つでした。

スプリント衝撃の結末

様々な関心が集まった世界選手権は、7 月 14 日のスプリント種目から開幕。スイスファンにとって最高の結果が待っていました。

女子ではシモーネ選手が優勝、男子では出場 3 選手が上位に並ぶ 1-2-3 フィニッシュを達成。男子の 3 人、キブツ選手、メルツ選手、ミューラー選手がいずれも「マチアス」の名を持っていた点も驚きでした。仮に小説やマンガでこのような結末を描いたとしたら、あまりに出来過ぎていて安っぽく感じられてしまいそうなぐらいです。

大会期間中、会場で配布され続けた日刊速報誌によると、22 歳の新チャンピオン、マチアス・キブツ選手は自らを「スプリント・オリエンテーリングと共に育った」世代と表現し、自信を持ってレースに臨んだとのこと。スプリント決勝は市街地レースで、開会式直前に行われ、多くの少年少女ファンも観戦していました。開会式直後には、世界選手権スプリント表彰に先立ち、小学生向けレースで上位となった少年少女たちも同じ舞台で表彰されました。(この辺りの演出も、うまいものです。)

その表彰で、司会者が「彼ら・彼女らから未来のチャンピオンが生まれることになるでしょう」といったコメントを付けていましたが、それは現実のものとなるかもしれない、いや、なるのではないか、と思わされます。

（WOC2012 公式サイトより）

女王敗れる

スプリントの 3 日後には、ミドル決勝が行われました。ここでは、中盤でシモーネ・ニグリ選手がいわゆる「90 度パラレル」。脱出方向を誤り、2 分半のミスを喫し、最終的に 5 位に沈みました。「ミスの後も全力を尽くし、入賞を勝ち取った」ことを賞賛する向きもあり、それは非常に納得できる評価ではありましたが、結果を求めるファンにとっては悲しい結果だったと想像されます。

無数の石が転がった、あるいは下草が繁った(場所によってはその両方の特徴を備えた)足場が選手を悩ませる、難テレインだったようです。ミドル翌日の日刊速報誌には、男子 2 位バレンチン・ノビコフ選手(ロシア)の、「一筋縄ではいかない地面だった。終始、走っているというより『跳んでいる』あるいは『泳いでいる』ようだった」とのコメントが紹介されていました。こういうテレインでは、つい「行くべき方向」よりも「その場その場で行きたくなる方向」に足が向いてしまうものです。男子 3 位のファビアン・ヘルトナー選手(スイス)は、「20m ごとにコンパスを確認」して、凌いだとのこと。あらゆるコースを走り尽くしているであろう女子優勝のミンナ・カウッピ選手(フィンランド)の「今まで走った中

で最もハードなコースだったかもしれない」という言葉が、選手たちの苦闘を窺わせました。

ちなみにミンナ選手は、これで 9 つ目の世界選手権金メダル。その内 5 つはリレーでの獲得、アンカーとして各国エースとのぶつかり合いに何度も競り勝っており、勝負根性を見せ付けています。さらに多くの金メダルを獲得しているシモーネ選手の陰に隠れがちですが、間違いなく歴史に残る名選手であり、「シモーネの宿敵」と言えるでしょう。

充実のメルツ

ミドル決勝の 2 日後は、ロング決勝でした。シモーネ選手が「V 奪回」となりました。中盤でミドルの時のようなミスを繰り返しそうになりながらも(こうした状況が、GPS データにより、リアルタイムで衆目にさらされるのが現在の世界選手権です)、ロングでは見事に踏みとどまりました。なかなか負けない強さと共に、負けた直後に立ち直る強さを持ち合わせている点が、まさに「女王」です。

男子ではマチアス・メルツ選手がスプリントに続いて 2 位となり、安定した実力を証明しました。レース後のメルツ選手は「こういうレースでは、特定のレッグを速く走るよりも、全体に渡ってうまく進めることが鍵だ」と話したとのこと。どんなレッグが来ても対応できる、全てが備わった選手ならではのコメントです。

スイスファンも、こうした結果を受けてリレーに向けて期待を高めたはずです。「男女アベック優勝という最高のハッピーエンドになるのではないか?」 実際の結果は…。

ほろ苦い終幕

ロング決勝の 2 日後、近接テレイン(一部は共通)で行われたリレー。スイスは女子優勝、男子 4 位という結果で大会を締めくくりました。シモーネ選手の世界選手権での獲得金メダル数は、通算で 20 の大台に乗りました。

あくまで個人的な印象で述べれば、「やや意外な結果」でした。個人戦の結果からは男女の順位が逆の方がしっくり来るような気がしていました。すなわち、女子は上々のレース運びをし、男子は少し失敗があったように感じられた、ということです。

なお、筆者は日本チーム 2 走として(屈辱ではありますが)、男子上位陣の、アンカー勝負をテレイン内で目にすることとなりました。上位 3 チームと共に固まって最終一つ前のコントロールに向かう最中、最終二つ前のコントロールにまだ到達していないマチアス・メルツ選手とすれ違いました。余裕がない頭の中で「スイスの優勝はなさそうだ」とおぼろげに考えたことを覚えています。

後に、日本チーム関係者から、スイスの優勝の可能性が潰えた時点(これも GPS データや、TV コントロールの画像から、早期に分かってしまいます)の会場の様子を聞きました。「ブーイングまではもちろんなかったけれども、期待外れという雰囲気は拭い難く漂っていた」という話でした。彼ら・彼女らは、スイス選手たちは、本当に厳しい場所で勝負しています。

リレー表彰式の写真 大会公式サイト(http://www.woc2012.ch/)より

強者に悲哀あり

ロングの決勝会場で、ある人物から話し掛けられました。その人物は、元スイス代表選手で、2005 年の世界選手権前年に、日本にトレーニングに来ていた選手の一人でした。

「5 年前に股関節を故障してしまって、それ以来、走っていないんだ。でも、今こうして地元の世界選手権を楽しんでいる」。

「日本ではお世話になった。結局 2005 年は代表になれなかったけれど、合宿の時のことはよく覚えているよ」。

世界チャンピオンが次々に生まれる国は、「世界チャンピオンに近付きつつ、世界チャンピオンになれない選手」が、次々に生まれる国でもあります。(その彼は、7 週間前に結婚したばかりで、新妻と共に来場しており、かつてのチームメイトに温かい声援を送っていました。決して暗い表情をしていたわけではないことを付け加えておきます。)

リレーの晩に行われたバンケットでは、スイスチームのコーチ陣に「おめでとう」の言葉を掛けに行きました。二人がその言葉を受け止めてくれたものの、一人は「ああ…」という返事一言、もう一人は軽く微笑んだ後すぐ真顔に戻る、という反応でした。その後遠巻きに観察したところ、選手たちが踊っている中(バンケット会場にはダンス用の舞台が用意されていた)、スイスコーチ陣はしばらく真剣な表情での話し合いを続けていました。世界最大級の期待、そしてプレッシャーを受けて地元での大会に臨んだスイスチームにとっては、あれほどの結果を残した今回も、最高の世界選手権とは言えなかったのかもしれません。

「地の利があれば、地の不利もある」。「強いことはつらいこと」。これらの言葉が頭に思い浮かんで来る場面でした。

(松澤俊行)

<松澤俊行プロフィール>

1972 年静岡県生まれ。1999 年以降、世界選手権に 11 回出場。12 回目を目指すべく、再出発を期している。